

氏名	田 坂 純 雄
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	甲 第 6 4 号
学位授与の日付	昭和36年 3 月31日
学位授与の要件	医学研究科外科系皮膚泌尿器科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学位論文題目	膀胱癌の化学療法, 膀胱癌の剥離細胞学的研究
論文審査委員	教授 大村 順 一 教授 陣内伝之助 教授 浜 崎 幸 雄

学 位 論 文 内 容 要 旨

著者は尿路腫瘍の剥離細胞診をこころみ、臨床的に膀胱癌と診断される程度の悪性度を有し、且つ進展した膀胱癌では剥離細胞をかなり認めるとの結果を得た。又、各種制癌剤が腫瘍組織にある程度の影響を及ぼすとの報告から、当然剥離細胞にも制癌剤投与による変化が出現することを期待し、予め剥離細胞に及ぼす他の因子について検討した後、比較的早期の膀胱癌の術前に各種制癌剤を全身的及び局所的に投与をおこなって、臨床像及び病理組織像と共に剥離細胞の変貌を追求した。

その結果、剥離細胞では細胞質並びに核の空泡形成その他が投与量の増加に伴って多数の細胞に出現するのを認めた。以上のことは制癌剤の全身投与では少ないが、局所投与では腫瘍に及ぼす影響が比較的大であるとの結論を得た。

昭和35年 4 月 3 日 第48回日本泌尿器科学会総会
 昭和35年12月18日 第19回日本癌学会総会
 昭和34年10月25日 第11回西日本皮膚科泌尿器科連合地方会
 昭和35年10月 2 日 第12回西日本皮膚科泌尿器科連合地方会

論文審査の結果の要旨

田坂純雄提出の「膀胱癌の化学療法，膀胱癌の剥離細胞学的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

著者は尿路腫瘍の剥離細胞診をこころみた結果，膀胱癌では剥離細胞を高率に認め，又各種制癌剤が腫瘍組織にある程度の影響を及ぼすとの報告から，癌剥離細胞にも制癌剤投与による変化が出現することを期待し，予め剥離細胞に及ぼす他の因子を検討した後，膀胱癌の手術前に各種制癌剤を全身的並びに局所的に投与して，膀胱癌の変貌を剥離細胞を中心に追求した。

その結果，剥離細胞では細胞質及び核の空泡形成等が投与量の増加に伴って多数の細胞に出現するを認め，制癌剤局所投与で顕著であるとの結論を得ている。この結果は，膀胱癌が移行上皮を発生母地とした比較的限局性の多発性傾向を有する腫瘍で，内視鏡操作が容易，且連続生検可能である点等も考慮して，人癌における癌化学療法の研究に主要な役割を果すことを示す重要，且有意義な研究であるといえる。

以上の通り本論文は新しい知見に富み，学術上有益であり，著者は医学博士の学位を授与せらるべき学力を有すると認める。